

鴨川

北川巧

(2020 年入学 4 期生)

私の好きな京都は鴨川である。京都にある鴨川をご存知だろうか。鴨川は京都市北西部の嵯峨ヶ岳をその源流とし、雲ヶ畑を経て、鞍馬川を加えた後、上賀茂付近で京都盆地に流れ出る。その後、出町付近で、京都市の北東から大原、八瀬を流れ下ってきた高野川と合流し、さらに四条大橋上流で白川を加えた後、京都市の中心部を貫流しながら南西方向に流れを変え、下鳥羽付近で桂川に注ぐ。鴨川の流域面積は約 207.7km²、幹川流路延長は約 33km であるが、河床の平均勾配は 1/200 と急流であり、これは東寺の五重塔の頂上とその約 8km 上流に位置する北山通がほぼ同じ標高であることから分かる。また、淀川水系の一級河川とされている。

そして、悠久の歴史の中で千年の都と京文化を育んできた川であり、清澄さを保ち、老若男女の憩いの場として多くの人々に親しまれている。

鴨川の歴史

794 年の桓武天皇による平安遷都の際、鴨川は四神相応の地相でいう「東の青龍」にあたる重要な川とされた。四神相応とは方角を司るとされる四神に対応し、最もよいとされる地形のことである。日本では平安京がこれに当たるとされた。以来、鴨川は神聖な川として尊ばれ、その水は古くから宗教的儀式に重用されることとなった。上賀茂神社の境内には引水した「ならの小川」が流れ、「明神川」と名を変えたのち、その水は社家町の家々に取り込まれ、かつては神官たちの禊ぎに供されていた。下鴨神社においては、今もなお、鴨川の伏流水を御手洗池に集め、清めの神事を行なっている。鴨川の流路は、出町付近で高野川と合流した後ほぼ直線的に南下し、明瞭な Y 字形をなしている。そのため、平安京造営の際に人工的に都の東側に付け替えられた説もあったが、その後の地質学的な調査の結果、現在では当時から今の位置を流れていたことが通説である。鴨川の名前の由来は諸説あるが、平安京造営以前から鴨川の中流域に定住していた賀茂氏に由来するという考え方が一般的であり、賀茂氏の氏神である上賀茂神社と出町付近の下鴨神社にちなんで、高野川合流点より上流を「賀茂川」、下流を「鴨川」と表記されることが多い。鴨川の治水の歴史は古く、平安京造営の頃から築堤工事が行われていたと言われており、824 年には鴨川治水を担当する「防鴨河使」と呼ばれる官職がおかれ、より積極的に築堤工事が進められた。また、871 年には堤防を害することのないようその近辺での耕作を禁止する命令が出されるなど、朝廷では鴨川の治水を重要視していたことがうかがえる。平安時代には現在見られるような連続した堤防が設置されていたと考えられている。しかし、このように治水対策が進められたにもかかわらず、鴨川は氾濫を繰り返し、白河法皇でさえ「天下三不如意」の一つとして嘆いたと伝えられている。その後も豊臣秀吉による洛中を囲む「御土居」や、江戸時代の京都所司代に

よる「寛文新堤」などは、京の防御や市街地の整備が目的であったと言われている。これらは、鴨川の氾濫から市街地を守る本格的な治水対策としても評価されており、鴨川の治水は時の為政者の重要な課題であった。鴨川における近代治水のはじまりは、昭和10年の大水害を契機に行われた改修工事である。この水害において鴨川ではかろうじて破堤は免れたものの、甚大な被害に見舞われた。これを契機に京都府では、昭和11年から大規模な改修事業に着手した。これらは、柊野堰堤などの砂防施設により土砂の流出を抑制するとともに、鴨川の桂川合流点から柊野堰堤まで、高野川の鴨川合流点から上高野付近までの間において、河道の掘削や拡幅などの改修工事を行い、昭和22年に完了した。この昭和の大改修により鴨川の治水安全度は飛躍的に向上し、その後に発生した昭和10年洪水を上回る規模の昭和34年8月の洪水においても大きな被害を免れることができた。しかし、戦争の混乱等により京阪電鉄と琵琶湖疏水の地下化が実現できず三条と七条間の河道拡幅が行われなかったことは、その後の治水対策の重要な課題となった。その後、昭和62年にこれらの地下化が実現され、河道の拡幅が可能となり、平成4年から平成11年にかけて改修工事が行われた。平成の改修では、曲線を取り入れた石積護岸により周辺景観との調和に配慮がされるとともに、シダレザクラをはじめとする四季折々の花木や鴨川の水面を眺めながら散策できる「花の回廊」が整備された。

鴨川の現在

現在、鴨川は老若男女の憩いの場として多くの人に親しまれている。私は、鴨川はたくさんの魅力を有していると思う。鴨川の魅力は季節の移り変わりとともに様々な顔を見せてくれることである。春は河川敷に桜が咲き乱れ、夏の風物詩としては、料理店などが川の上に座敷を設け、茶屋等が料理を提供する「納涼床」がある。川の涼を感じられとても趣がある。秋には紅葉に染まった木々を楽しむことができ、冬には京都を代表する鳥とも言われる水鳥が多く見られる。日本にはたくさんの河川が存在するが、自然と人間が手を加えたものが調和し四季を感じられる場所は鴨川だけではないだろうか。また、鴨川では、「三条大橋」や「鴨川等間隔の法則」なども見られる。散歩などをするとき



に、ご覧になってはいかがでしょうか。

今回様々なことを調べていく中で、鴨川は京都を語る上でなくてはならない存在だと改めて感じた。身近の河川として人々の暮らしを支えるのはもちろん、動植物が豊かな自然は私たちに癒しをも与えてくれる。京都は日本でも有数の観光都市であり、観光客が多い。京都に住んでいる人はもちろん、観光に来る人に対しても癒しを与えてくれる存在になってほしいと私は思う。

参考文献

吉超昭久著（ 2021 年） 『京都・鴨川：「光と影」からみる実像』 文理閣出版 262P
門脇禎二・朝尾直弘共編 （2001） 『京の鴨川と橋：その歴史と生活』 思文閣出版
251P

“私たちの鴨川” 京都府 参照日 2022 年 6 月 30 日

<https://www.pref.kyoto.jp/kamogawa/1183643010506.html>

“京都と鴨川 第1章” 京都府 参照日 2022 年 6 月 30 日

<https://www.pref.kyoto.jp/kamogawa/documents/1175491647483.pdf>

“鴨川/京都府ホームページ” 京都府 参照日 2022 年 6 月 30 日

<https://www.pref.kyoto.jp/kamogawa/>

画像引用元

<https://www.gettyimages.co.jp/%E5%86%99%E7%9C%9F/%E4%BA%AC%E9%83%BD-%E9%B4%A8%E5%B7%9D>